

日本語・日本文化研修留学生プログラム

ー東京外国語大学における日研生プログラムの現状と展望ー

鈴木 智美

(2006. 10. 31 受)

【キーワード】 日本語・日本文化研修留学生、全学日本語プログラム、日研生専門科目、修了レポート・エッセイ、大学間交流

1 東京外国語大学における日研生プログラム

1.1 日研生プログラムの歴史

「日本語・日本文化研修留学生」(以下「日研生」とする)とは、日本語力のさらなる向上と、日本事情・日本文化に対する理解をより深めることを目的とし、文部科学省の奨学金を受けて1年間日本で勉学・研修を行う留学生のことである¹。本国の大学で日本語・日本文化を専攻している学生が対象となる²。現在、全国50以上の大学で、50以上の国・地域からの約380名に上る日研生が教育・研修を受けている³。

東京外国語大学は、1980年(昭和55年)に日本で最初にこの日研生を受け入れたという歴史を持つ⁴。東京外国語大学における日研生の教育・研修は、外国語学部附属日本語学校、外国語学部日本語学科、外国語学部日本課程をそれぞれ中心として続けられ、2000年(平成12年)10月に担当教員を留学生日本語教育センターに

¹ 文部科学省「国費外国人留学生制度について」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/06032818.htm)参照。募集要項は「平成18年度大使館推薦による国費外国人留学生(日本語・日本文化研修留学生及び教員研修留学生)の募集について」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/05102501.htm)、および「平成18年度大学推薦による国費外国人留学生(日本語・日本文化研修留学生)の募集について」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/05122001.htm) (いずれも毎年更新)を参照。

² ただし、大学での学習期間が1年に満たない者は対象とならない。(募集要項「1. 応募者の資格及び条件」参照)

³ 数値は、『日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議(第9回)報告書』より平成15年度(2003年度)の実績について述べられた部分を参考とした。

⁴ 『東京外国語大学史』(1999:1322)

おき、日研生のための独立した新しいプログラムがスタートした。

2005年（平成17年）6月には、留学生日本語教育センターに新たに「日研生プログラム運営委員会」が発足し、カリキュラムの充実に向けた取り組みを始めている。本稿の執筆者は、2004年（平成16年）4月より、日研生プログラムの教育・運営に携わっている。

1.2 日研生プログラムの意義

日研生の日本語力は一般に高く、日本語・日本文化に関する知識・興味も深くまた広範囲にわたっている。日研生プログラムは、将来の親日家を育てていくという重要な意義をも持つプログラムであるとされる。

本学にとっても、日研生は貴重な人材となる留学生である。日研生は、留学生日本語教育センターの「全学日本語プログラム」⁵で、各々のレベルに合わせてその日本語力を磨くだけでなく、日本に関する知識と興味、またその日本語力の高さを生かして、外国語学部開講の各科目や、総合科目における日研生科目を日本人学生とともに受講している。本学の「IJ共学」⁶の理念を、まさに実現する一助となっていると言えるだろう。

また、その出身国も多岐にわたっており、出身国や地域に関わる言語・文化サークル等を始めとして日本人学生と交流する者も多く、本学の多言語・多文化キャンパスの実現に寄与している。

帰国後は、出身国の大学を修了した後、再び日本で勉学を続けることを希望する者も多い。大学院レベルの国費研究生として再来日を希望する者も多くいる。本学で研修を行った日研生のうち何名かは、実際に大学卒業後、本学の大学院地域文化研究科に正規の大学院生として入学している。優秀な日研生には、東京外国語大学において、再び大学院レベルの勉学・研究を続けていくことができるよう、彼らの将来の進路設計の一つとしてこれを定着させていくことも、本学にとって、今後推

⁵ 2004年（平成16年）4月より、留学生日本語教育センターにおいて全学向けに正式に開かれることとなった。短期留学生や研究生等の非正規生（一部正規の大学院生を含む）を対象とする日本語プログラムである。外国人教員や研究員は、2006年秋学期現在受講対象者となっていない。

⁶ 「IJ（=International and Japanese Students）共学」の意味である。本学の将来構想・グランドデザイン（<http://www.tufs.ac.jp/common/is/university/index.html> 参照）では、日本人学生と外国人留学生の共同生活、共同学習を充実させ、多文化交流キャンパスを実現することを目標の一つとして掲げている。

進すべき可能性を持つ点の一つではないかと考えられる。

1.3 受入れ人数と出身国

本学の「大使館推薦」⁷の日研生の受入れ定員は 12 名である。大学間交流協定に基づく「大学推薦」⁸の日研生の受入れ人数は、この大使館推薦の受入れ人数を超えないものと定められており⁹、本学では、大使館推薦と大学推薦を合わせて、毎年およそ計 15～20 名の日研究生を受け入れている。

年度ごとの受入れの詳細については、1995 年度以降のデータを留学生課にて整備している¹⁰。以下、表 1 はその抜粋に基づくものである。

表 1 1995 年度-2006 年度 東京外国語大学における日研生の受入れ人数と出身国

年度	受入れ人数 (下段は大学推薦の出身校)		出身国
	大使館推薦	計	
1995 年度	大使館推薦 11 名	計 11 名	韓国、中国、モンゴル、インド、シンガポール、オーストラリア、ブラジル、ロシア、フィンランド、フランス
1996 年度	大使館推薦 12 名	計 12 名	韓国、中国、インド、インドネシア、フィリピン、フィンランド、オランダ、ポーランド、ハンガリー、スロバキア
1997 年度	大使館推薦 11 名	計 12 名	韓国、中国、モンゴル、ベトナム、タイ、フィリピン、オーストラリア、ブラジル、ロシア、ブルガリア、イギリス
	大学推薦 1 名		
	ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院		
1998 年度	大使館推薦 12 名	計 13 名	韓国、中国(香港)、インド、ニュージーランド、ブラジル、トルコ、ウクライナ、ハンガリー、デンマーク、スイス
	大学推薦 1 名		
	ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院 (スイス国籍)		

⁷ 日本政府在外公館（大使館・総領事館）が現地で第一次選考を行い、合格者を文部科学省に推薦し、文部科学省が最終選考を行うもの。

⁸ 大学間交流協定に基づき相手大学から推薦された者について、各大学で審査の上、文部科学大臣に推薦し、選考が行われるもの。

⁹ 「各大学の推薦による採用人数については、原則として各大学の大使館推薦の受入れ人数を超えない範囲となる」とされている。（「申請に当たっての留意事項」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/05122001.htm) 参照)

¹⁰ 2004 年度に、留学生課留学生教育係の堀純子氏に、1995 年度以降のデータを電子化し、一覧にまとめる作業を進めてもらった。2005 年度以降は、後任の飯塚潤氏に引き続き整備してもらっている。

年度	受入れ人数 (下段は大学推薦の出身校)		出身国
1999年度	大使館推薦 12名	計 12名	韓国、中国（香港）、シンガポール、ベトナム、インドネシア、イラン、エジプト、ロシア、ポーランド
2000年度	大使館推薦 13名	計 15名	韓国、中国、モンゴル、中国（香港）、ベトナム、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、ロシア、ブルガリア、フランス、イギリス
	大学推薦 2名		
2001年度	大使館推薦 11名	計 14名	韓国、中国、ベトナム、オーストラリア、カナダ、アメリカ、スロベニア、イギリス
	大学推薦 3名		
2002年度	大使館推薦 10名	計 14名	韓国、中国、モンゴル、インドネシア、オーストラリア、エジプト、ポーランド、イタリア
	大学推薦 4名		
2003年度	大使館推薦 13名	計 17名	韓国、中国、モンゴル、中国（香港）、タイ、ベトナム、オーストラリア、ウクライナ、チェコ、ドイツ、フランス
	大学推薦 4名		
2004年度	大使館推薦 10名	計 17名	韓国、中国、モンゴル、タイ、インドネシア、オーストラリア、ブラジル、ウクライナ、キルギス、アゼルバイジャン、チェコ、フランス
	大学推薦 7名		

2005年度	大使館推薦 13名 大学推薦 8名	計 21名	韓国、中国、モンゴル、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、カナダ、ペルー、ブラジル、ロシア、ウズベキスタン、ブルガリア、チェコ、スイス、ドイツ、フランス、イギリス
	インドネシア大学、オーストラリア国立大学、リオ・デ・ジャネイロ大学、カレル大学、ジュネーブ大学、エアランゲン大学、フランス国立東洋言語文化学院、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院		
2006年度	大使館推薦 12名 大学推薦 8名	計 20名	韓国、中国、モンゴル、タイ、インドネシア、ニュージーランド、ブラジル、スウェーデン、チェコ、スイス、フランス、イギリス
	モンゴル国立大学、シーナカリンウィロート大学、インドネシア大学、ガジャマダ大学、カレル大学、ジュネーブ大学、フランス国立東洋言語文化学院、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院		

2 日研究生プログラムの教育・研修内容¹¹

2.1 年間スケジュール

2004年度より、本学における日研究生プログラムは、概ね以下の表2のようなスケジュールで運営している。

2005年度までは、校外実地研修（見学・実習体験等）をプログラム独自に設定することは特にしていなかった。しかし、2006度には試みとして行ってみることを検討している。また、全学の留学生向けに実施される見学旅行等には、従来通り日研究生も随時参加することができる。

¹¹ 各大学の教育・研修内容については、文部科学省「日本語・日本文化研修留学生コースガイド」（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/05102501/001.htm）にて毎年更新の上、公開されている。また、各国の在外公館には、この内容が冊子にまとめられて配布されており、留学を希望する学生は現地でこれを参照することができる。

表2 東京外国語大学における日研究生プログラムの年間スケジュール

10月上旬	入学式（短期留学生プログラム等と合同） コースオリエンテーション 全学日本語プログラムプレースメントテスト、レベル発表 秋学期開始 履修相談
10月末	履修科目提出締切
11月末	日研究生プログラムについての中間アンケート
2月上旬	秋学期受講調査・授業評価実施
2月中旬	修了レポートのアウトライン提出
2月後半	春学期オリエンテーション
4月上旬	春学期開始 履修相談
4月末	履修科目提出締切
5月～6月	修了レポート・エッセイ作成および提出
7月	口頭発表準備
7月後半	春学期受講調査・授業評価・プログラムアンケート実施
7月末	修了レポート・エッセイに基づく口頭発表
7月末	閉講式（短期留学生プログラムと合同）

2.2 開講授業科目

2.2.1 日本語－全学日本語プログラム

日研究生の教育・研修目標の一つである日本語力の向上に関しては、留学生日本語教育センターにおける「全学日本語プログラム」により、充実した教育・研修を行うことが可能となっている。

全学日本語プログラムでは、100（入門）レベルから 800（超級）レベルまで¹²の 8段階のレベル設定がなされ、計約 40 に及ぶ各種の日本語科目が開講されている¹³。短期留学生や日研究生、研究生などが受講する日本語科目は、すべてこの全学日本語プログラムに集約されている。また、1週間に 10回の授業が行われる集中コースを設けることにより、国費研究留学生等の予備教育にも対応可能なものとなっている¹⁴。

¹² 100(入門)、200(初級)、300(初中級)、400(中級)、500(中上級)、600(上級1)、700(上級2)、800(超級)の各レベルである。日研究生の日本語レベルは概ね 500 以上が多い。

¹³ 1週間の延べ開講コマ数は、計 76 に上る。(1コマ=90分の授業)

¹⁴ 全学日本語プログラムのレベルと開講科目の見取り図は、留学生日本語教育センター「留

日研究生も、この全学日本語プログラムのプレースメントテストを受け、各々のレベルに応じて日本語科目を受講する。「総合日本語」の他に、「語彙・文法、読解、聴解、文章表現、口頭表現、時事日本語」などの「技能別日本語」、また超級レベルにおいては「ドラマ・ドキュメンタリー、文学日本語、ビジネス日本語」などの「テーマ別日本語」、またいくつかのレベルにまたがる「漢字」「発音」などの科目も受講できる。

以下の表3に、2005年度の日研究生の秋学期の受講状況を例として示す。縦軸には、日研究生が受講した科目を超級レベルから順に並べている。横軸には、21名の日研究生のうち、受講した者の欄に○を付している。一人の学生がどのような日本語科目を受講したのかは、1つの列を縦にたどってみるとわかる¹⁵。最後の欄の「合計受講数」が、各学生が受講した日本語科目の合計数になる¹⁶。

表3 2005年度日研究生 秋学期の日本語科目受講状況

科目	受講状況 (21名のうち、受講者に○印)																				
超級(800)																					
読解	○	○		○	○																
ドラマ	○	○	○	○	○																
時事日本語				○	○	○															
文学日本語	○	○	○	○	○																
ビジネス				○																	
上級2(700)																					
総合日本語						○	○		○												
語彙・文法						○	○			○											
読解						○	○	○													
聴解									○												
文章表現				○					○												

学生教育プログラム」(<http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/program.htm#05>) 参照。

¹⁵ 受講科目数が「1」(総合日本語のみ)となっている者が1名いるが、例外的に学期半ばで受講レベルを600から700に変えたため、受講数が少なくなったものである。

¹⁶ この数字は受講「科目」数であり、1週間の延べ受講コマ数(回数)ではない。「総合日本語」は、300-600レベルで週3回、700レベルで週2回の授業が行われている。

2005年度日研生の秋学期（入学時）の日本語レベルは、800（超級）5名、700（上級2）3名、600（上級1）6名、500（中上級）4名、400（中級）3名であった。全学日本語プログラムでは、3単位相当の授業¹⁷で「A」あるいは「B」の成績¹⁸を取得すれば、次学期には上のレベルに上がることができる。日研究生はほぼ全員、春学期には上のレベルに進む。ただし、超級レベルについては、それ以上の進級はなく、春学期には専門科目等の受講数が多くなる。

2.2.2 日研究生専門科目

日研究生の教育・研修のもう一つの目標である日本事情・日本文化等については、留学生日本語教育センターで日研究生のための専門科目が開講され、教育が行われている¹⁹。また、外国語学部で通常開講されている講義科目も、指導教員の指導のもとに、適宜受講することができる²⁰。

以下、表4に2006年度（2006年10月～2007年9月）に、留学生日本語教育センターで開講予定の日研究生専門科目を示す。〔 〕内の数字は、受講対象者の日本語レベルの目安を、全学日本語プログラムのレベルコードで示したものである。

表4 2006年度 留学生日本語教育センターにて開講予定の日研究生専門科目

秋学期（2006年10月～2007年2月）		春学期（2007年4月～2007年7月）	
科目名	講義題目	科目名	講義題目（予定）
[400-500] 日本の歴史と社会Ⅰ 日本の社会と文化Ⅰ	日本事情Ⅰ 現代社会文化論Ⅰ	[400-500] 日本の歴史と社会Ⅱ 日本の社会と文化Ⅱ	日本事情Ⅱ 現代社会文化論Ⅱ
[600以上] 日本の言語と文化Ⅰ	日本語文法概論Ⅰ	[600以上] 日本の言語と文化Ⅱ	日本語文法概論Ⅱ

¹⁷ 全学日本語プログラムでは、週1回の授業が半期（15週）で1単位に相当する。3単位相当とは、週3回分の授業ということになる。

¹⁸ A（優）、B（良）、C（可）、D（不合格）の4段階の評価である。

¹⁹ いくつかの科目は、外国語学部における総合科目と共通開講になっており、3年次以上の日本人学生、また日研究生以外の非正規の留学生（短期留学生や研究生）も受講可能である。また、いくつかの科目は、留学生日本語教育センターにおける「6か月コース」（国費研究留学生・国費教員研修留学生予備教育プログラム）と共通開講となっている。

²⁰ 外国語学部の科目を受講する際には、指導教員の指導に基づき、授業担当教員に「聴講依頼」を提出する。

日本の言語と社会 I 日本社会文化特論 I 現代文化特論 I 日本語・ 日本文化特論 I	現代日本語意味論入門 日本文化概論 大衆文化論 日本語と日本語教育 研究の諸相 (リレー講義)	日本の言語と社会 II 日本社会文化特論 II 現代文化特論 II 日本語・ 日本文化特論 II	日本語教育入門 比較教育学概論 比較文化論 (リレー講義) ²¹ (題目未定)
[全員受講] ²² 日本語・ 日本文化研究 I	日本語・ 日本文化研究 I	[全員受講] 日本語・ 日本文化研究 II	日本語・ 日本文化研究 II

2.3 受講科目数の目安

2005年度より、履修のしかた、および履修科目数の目安を日本語のレベル別に定めている。日本語レベルが中級～中上級の場合は、全学日本語プログラムの日本語科目を重点的に履修し、日本語力を高めることをまず目標とする。日本語レベルが上級以上の場合には、日本語科目と日研生専門科目とをバランスよく受講する。日本語レベルが超級以上の場合には、日研生専門科目だけでなく、外国語学部の一般科目の受講も積極的に行うよう指導する。

以下、表5に2006年度の受講科目数の目安を学期別を示す。

表5 2006年度 日研生のレベル別受講科目数の目安

2006年度 秋学期 (2006年10月～2007年2月)
(1) 「日本語」(全学日本語プログラム) 400～500 レベルは <u>週8</u> (総合3+技能5) (+ α (漢字)) 600 レベルは <u>週6以上</u> (総合3+技能3以上) 700 レベルは <u>週5以上</u> (総合2+技能3以上) 800 レベルは <u>週3以上</u> (テーマ別)

²¹ 2005年度春学期の「比較文化論」は、大学推薦の日研生の受入れ担当教員等(外国語学部の教員)7名と、留学生日本語教育センターの教員5名とがリレー講義を行った。

²² 2005年度の「日本語・日本文化研究」は、「修了レポート」(2.4参照)の執筆者のみ受講としていたが、2006年度より通年全員の受講とすることにした。

<p>(2) 日研究生専門科目</p> <p>400～500 レベルは <u>2 科目まで可</u> (400～500 対象クラス)</p> <p>600 レベルは <u>2 科目以上</u> (600 以上対象クラス)</p> <p>700 レベルは <u>2 科目以上</u> (600 以上対象クラス)</p> <p>800 レベルは <u>4 科目</u> (600 以上対象クラス)</p>
<p>(3) リレー講義「日本語と日本語教育研究の諸相」</p> <p>全員受講</p>
<p>(4) 修了レポート・エッセイへの準備「日本語・日本文化研究Ⅰ」</p> <p>全員受講</p>
<p>(5) 外国語学部科目</p> <p>適宜受講</p>
<p><受講パターン></p> <p>400 日本語 8 ー (+日研究生科目 1～2) +リレー講義 1 = <u>9</u> + α</p> <p>500 日本語 8 ー (+日研究生科目 1～2) +リレー講義 1 = <u>9</u> + α</p> <p>600 日本語 6 ー +日研究生科目 2 ー +リレー講義 1 = <u>9</u> + α</p> <p>700 日本語 5 ー +日研究生科目 2 ー +リレー講義 1 = <u>8</u> + α</p> <p>800 日本語 3 ー +日研究生科目 4 +リレー講義 1 (+外国語学部) = <u>8</u> + α</p> <p>※全員修了レポート・エッセイ <u>+1</u></p>
<p>2006 年度 春学期 (2007 年 4 月～7 月) (予定)</p>
<p>(1) 「日本語」(全学日本語プログラム)</p> <p>500 レベルは <u>週 8</u> (総合 3+技能 5) (+ α (漢字))</p> <p>600 レベルは <u>週 6 以上</u> (総合 3+技能 3 以上)</p> <p>700 レベルは <u>週 4 以上</u> (総合 2+技能 2 以上)</p> <p>800 レベルは <u>週 3 以上</u> (テーマ別)</p> <p>800 レベル (2 回目) は <u>週 2 以上</u> (→(2)あるいは(5)で代替可)</p>
<p>(2) 日研究生専門科目</p> <p>500 レベルは <u>2 科目まで可</u> (400～500 対象クラス)</p> <p>600 レベルは <u>2 科目以上</u> (600 以上対象クラス)</p> <p>700 レベルは <u>2 科目以上</u> (600 以上対象クラス)</p> <p>800 レベルは <u>3 科目以上</u> (600 以上対象クラス)</p> <p>800 レベル (2 回目) は <u>2 科目以上</u> (600 以上対象クラス)</p>

(3) リレー講義「比較文化論」 全員受講
(4) 修了レポート・エッセイ作成「日本語・日本文化研究 II」 全員受講（→この科目をもって、(1)か(2)のいずれか一つと代替可）
(5) 外国語学部科目 各自の専門分野に関連のある科目を選び、受講可能。
<p><受講パターン></p> <p>500 日本語 8ー（+日研究生科目 1ー2）+リレー講義 1 = <u>9</u>+α</p> <p>600 日本語 6ー +日研究生科目 2ー +リレー講義 1 = <u>9</u>+α</p> <p>700 日本語 4ー +日研究生科目 2ー +リレー講義 1（+外国語学部）= <u>7</u>+α</p> <p>800 日本語 3ー +日研究生科目 3ー +リレー講義 1（+外国語学部）= <u>7</u>+α</p> <p>800（2回目） 日本語 2ー +日研究生科目 2ー +リレー講義 1 +外国語学部 = <u>5</u>+α</p> <p>※全員修了レポート・エッセイ <u>+1</u></p>

2.4 修了レポートおよびエッセイ

東京外国語大学では、日研究生は外国語学部の「特別聴講学生」に準じる形で、その教育・研修を行うこととして受け入れている。1年間の教育・研修の修了要件は、「研修報告書」を提出することになる²³。

日研究生の研修報告書の内容については、2004年度より「修了レポート」と「修了エッセイ」に分けることとした。「修了レポート」は、各自が1年間の研修期間に、日本語あるいは日本文化に関わる興味のあるテーマに取り組み、その研究成果を約8,000～12,000字（A4版6～8枚）にまとめるものである。レポートの内容に基づき研究発表も行う。「修了エッセイ」は、1年間の研修を終えて得たもの、研修期間に学んだことを1,200～2,000字程度（A4版1～2枚）にまとめるものとしている。エッセイの内容に基づき、スピーチも行う。

レポート執筆の対象者は、秋学期（入学時）の日本語レベルが500（中上級）以上の者となる。プログラム前半の秋学期終了時（2月）には、各自レポートのアウトラインを提出する。2005年度からは、このアウトラインの完成度に従い、レポート執筆対象者をさらに絞り込むこととした。

²³ 「東京外国語大学外国人留学生規程」第4条第2項および第4項参照。

以下の表6に、レポートおよびエッセイ執筆のおおまかなスケジュールを示す。

表6 修了レポート・エッセイ執筆スケジュール

修了レポート		修了エッセイ
2月末	レポートアウトライン提出 レポート執筆者および指導担当者決定	
4～5月	執筆および指導	5～6月 執筆と指導
6月上旬	完成稿提出	
6月	修正および発表用ハンドアウト作成	6月末 最終稿提出
6月末	最終稿提出	
7月	口頭発表準備	7月 スピーチ準備
7月後半	研究発表およびスピーチのリハーサル	
7月末	研究発表会（研究発表一人10分、スピーチ一人5分） ²⁴	
9月	レポート集完成	

レポートおよびエッセイは、いずれも『日本語・日本文化研修留学生 修了レポート集』として1冊にまとめ、各関係先に配布している。

日研究生プログラム運営委員会が新たに発足したことを受け、2005年度より修了レポートおよびエッセイについては、留学生日本語教育センターに関わる複数の教員による指導体制をとることが可能になった。2005年度春学期（2006年4月～7月）には、日研究生プログラム運営委員、および日研究生専門科目担当の教員を中心に、7名の教員がレポート・エッセイの指導にあたった。

以下の表7に、2004年度と2005年度の修了レポートおよびエッセイのテーマを例として示す。専門性の高い研究テーマを含め、日本語・日本文化に関わる様々なテーマが選ばれていることがわかる。エッセイの内容設定にもそれぞれ工夫が見られる。

²⁴ 2005年度の研究発表会は、留学生日本語教育センターの100名収容のホールで行った。レポートに基づく研究発表は一人10分、エッセイに基づくスピーチは一人5分としている。発表会全体で約3時間、またリハーサルにも同じほどの時間を要する。

表7 2004年度および2005年度 修了レポート・エッセイのテーマ

2004年度 修了エッセイ (3名)
「東京外国語大学における1年間の留学」 「日本での日々」 「あるタビという人生」
2004年度 修了レポート (14名)
「日本語とインドネシア語の料理で用いる動詞の比較」 「引きこもりの真相」 『『励ます』ときに用いる表現-日・タイ比較から見る日本人の価値観-』 「若者言葉」 「アイヌ史」 「日本におけるウェブ日記とウェブログ」 『『芽むしり仔撃ち』とその中における日本社会要素 -大江健三郎の小説をめぐって-』 「手話学的見地からみた日本の手話」 「日本とモンゴルの諺の比較」 「日本語のとりたて助詞『だけ』と『しか〜ない』の使い分け」 「日本の若者族について」 「シャヒン・ファジロフの俳句をアゼル俳句と呼べるか？」 「倉橋由美子の『巨刹』の分析」 「若者を中心とした現代日本人の外国人に対する対応の違いについて」
2005年度 修了エッセイ (9名)
「将来の掛け替えのない思い出」 「一年間の研修を終えて」 「日本での経験」 「日本人の謙遜」 「日本語と英語」 「孤独なさ迷う留学生の感想」 「一年間の研修を終えて」 「漢字の勉強」 「日本でウズベキスタンをもっと知らせたい」

2005年度 修了レポート (12名)

- 「日本文化における温泉の役割」
- 「日本語の思いやりの言葉-言葉から見た日本と中国の文化の相違点-」
- 「芥川龍之介の時代を表す『或阿呆の一生』」
- 「宮沢賢治の童話-歴史的背景との関連の考察」
- 「郵政民営化」
- 「日露文化交流の歴史的な経過」
- 「政治的神話-その理論的考察をめぐって-」
- 「出稼ぎに来たペルー人-先祖の故郷で見込みのある将来を見付けよう-」
- 「『白村江の戦い』について」
- 「現代日本社会における落語」
- 「イギリスと日本のアニメーション界の相違」
- 「日本のホラー映画の恐怖の秘密」

3 日研生プログラムの今後の展望と課題

3.1 東京外国語大学の特色を生かしたプログラムの確立

日研生プログラム運営委員会の発足を受けて、現状では充実したカリキュラム内容が整いつつあるが、今後の発展を期するとすれば、東京外国語大学の特色を生かして、プログラム内容を確立していくことが課題として挙げられる。

東京外国語大学は、その将来構想・グランドデザインに、次の3つの拠点大学化構想を掲げている²⁵。

- (1) 世界諸地域の言語・文化・社会に関する高等教育の拠点
- (2) 世界諸地域の言語・文化・社会に関する学際的かつ先端的な研究拠点
- (3) 日本語教育研究の世界的な拠点

これらの点を踏まえ考えると、東京外国語大学における日研生プログラムの特色は、以下の3.1.1および3.1.2で述べるように、「多言語・多文化環境における学び」および「日本語・日本語教育の充実」の2点に集約されるのではないかと思われる。

²⁵ 東京外国語大学「将来構想・グランドデザイン」(<http://www.tufs.ac.jp/common/is/university/index.html>) 参照。

3.1.1 多言語・多文化環境における学び

東京外国語大学の特徴の一つに、教育されている言語・文化の幅の広さが挙げられる。外国語学部には、世界のほぼすべての地域にわたる 26 の専攻語があり、それらの地域の言語・文化・社会に関わる教育・研究が行われている。

また、2006 年 5 月 1 日現在、東京外国語大学では世界 35 か国 1 地域にわたる計 78 の大学・機関との交流協定が結ばれており²⁶、学生を海外に送り出すだけでなく、世界諸地域からの留学生も積極的に受け入れていくことがうたわれている。

実際に、東京外国語大学の外国語学部および大学院では、2006 年 5 月 1 日現在、世界 50 の国・地域からの 500 名以上の留学生が学んでおり²⁷、さらに、留学生日本語教育センターで予備教育を受ける留学生も、2006 年度には 48 の国・地域からに及んでいる²⁸。

東京外国語大学におけるこのような「多言語・多文化」環境は、日研生プログラムにとって 2 つの意味を持つことになる。

一つは、日研生にとって、自国や出身地域の言語・文化が日本の大学においてどのように教育されているのかを知り、自分自身でも異なる視点からそれをとらえ直す機会が得られるということである。外国語学部の日本人学生も、世界の様々な地域の言語・文化に深い関心を持って学んでいる学生たちであり、日研生との交流はそれらの学生にとっても意義あることと思われる。

また、もう一つは、日研生が他の多くの国・地域からの様々な留学生とともに日本語を学び、日本語を教育言語として専門領域に関わる教育を受け、さらに日本語を媒介言語として互いに交流を深めるという点である。これは日研生プログラムだけのことではなく、留学生日本語教育センターにおける「全学日本語プログラム」が、そのような学びの場を作り出すことに大きく寄与している。

このことは、東京外国語大学で研修を行う日研生にとって、強く印象に残る点の一つになっているようである。日研生プログラムの終了アンケート(2003 年度～2005 年度)では、このプログラムに参加して良かったこと、プラスになったことの中に、

²⁶ 東京外国語大学「外国の大学・研究機関との連携」(http://www.tufts.ac.jp/common/is/university/gaikoku_renkei.html) 参照。

²⁷ 東京外国語大学「受入留学生の現況」(<http://www.tufts.ac.jp/common/is/ryugakusei/ukeire/index.html>) 参照。

²⁸ 「2006 年度留学生日本語教育センター留学生」(<http://www.tufts.ac.jp/common/jlc/students2006.htm>) 参照。

「世界の様々な国の人と会えて、その交流を通じて視野が広がったこと」「他の外国の留学生と一緒に日本語を学び、日本語で、日本の問題についていろいろ話し合うことができたこと」「各国の学生達と一緒に勉強し、様々な問題について有意義な議論を行うことができたこと」「国際人になってきたこと。世界中から来た人に会って、世界について勉強したこと」などが挙げられている。本学における日研究生プログラムならではの独自の国際性がプラスに受け止められ、そこに価値・意義が見出されていることがわかる。

このように、地球社会化時代とも呼ばれる現代の社会において、いわば世界へと開かれた環境の中で日本語・日本文化研修留学生として学ぶことができるのが、東京外国語大学の特色の一つであると言えるだろう。

3.1.2 日本語と日本語教育の充実

また、東京外国語大学における日研究生プログラムには、もう一つの特色がある。それは日本語および日本語教育の面からの充実したプログラムが確立されつつあるということである。

まず、留学生日本語教育センターにおける全学日本語プログラムにより、日研究生は各々の日本語レベルに応じて存分にその日本語力の向上に努めることが可能となっている。

また、この全学日本語プログラムは、日研究生の日本語力の向上にとどまらず、さらにもう一つの重要な意味を持っていると考えられる。それは、「日本語教育」の分野に興味を持つ日研究生にとって、これらの日本語科目を受講することそのものが、教授法の勉強につながっていくということである。

日研究生の中には、将来母国で実際に日本語教育に携わることになる者もあり、全学日本語プログラムを受講することは、まさに彼らにとって、日本語教授法の生きたモデルに日々触れることになる。

2005年度春学期には日研究生専門科目の一つとして「日本語教授法入門」を開講し、外国語学部の日本人学生とともに、数名の日研究生も20分間の模擬授業を行ってみる体験をした。この時、初めて教壇に立った日研究生は、「自分が受けた日本語の授業を参考にして、授業を組み立ててみた」とコメントしている。

また、高い日本語力を持つ日研究生にとっては、日本語の文法、意味、音声、文字等、日本語学の各分野の観点から、日本語を専門的・客観的に学ぶことにも大きな意味がある。

これまでも、音声学や文法論、意味論などが日研究生専門科目として開講されてきたが、2006年度秋学期には、留学生日本語教育センターの日本語・日本語教育に関わる諸分野を専門とする各教員が、それぞれの専門に関わる講義を順に担当する「日本語と日本語教育研究の諸相」をリレー講義として開講することにした。

このように、留学生日本語教育センターが日研究生プログラムの教育・運営を担当しているという強みを生かし、日本語と日本語教育に軸を置いたプログラム内容の充実を図ることが、今後の進むべき方向性となるのではないだろうか。

3.2 交流の推進と大学院レベルの教育との結び付き

その他、本学における日研究生プログラムの課題としては、以下の2点が挙げられる。

一つは、大学間交流協定などに基づく交流を推進することにより、世界の諸地域からの優秀な日研究生の獲得に努めることである。各国の大学等における日本語・日本文化教育の実際を知り、相手先の教員と情報・意見交換を行い、それらを日研究生プログラムのカリキュラムの検証に役立たせること²⁹などは、今後のプログラムの推進・発展のための一つの方法であると考えられる。

さらに、優秀な日研究生には、本国の大学を修了した後、再び本学にて大学院レベルの勉学・研究を進めていく道を提示することも、今後の重要な検討課題となるだろう。特に、本学のグランドデザインには「日本語教育研究の世界的な拠点」を目指すことが掲げられている。日研究生の中には、母国の大学を卒業後、日本語教育に携わることになる者もある。将来的にその地の日本語教育を主導していくべく、日本語教育に関わる専門的・実践的な力を身に付け、学位を取得するために、再び東京外国語大学を訪れ大学院で学ぶことを希望する者も多い。

日研究生の教育は、大学院レベルでの教育も継続して視野に入れていくことが、本学においては今後より必要になるだろうと思われる。

²⁹ 2006年11月に「平成18年度百周年記念教育研究振興基金助成事業」(学内)により、日研究生プログラムの推進・発展のため、協定校の中から日研究生の主要出身大学を選び、日本語教育事情調査を行う予定である。また、2006年3月には東南アジア地域(インドネシア、タイ)、2006年9月に中央アジア地域(ウズベキスタン、キルギス)にて、本学の日研究生の出身大学を中心に日本語教育事情調査を行い、先方教員と情報・意見交換を行った。

参考文献・資料

大阪外国語大学留学生日本語教育センター（2003）『日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議（第9回）報告書』

大阪外国語大学留学生日本語教育センター（2004）『日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議（第10回）報告書』

東京外国語大学（1997）「国立大学法人東京外国語大学外国人留学生規程」

東京外国語大学（1999）『東京外国語大学史-独立百周年（建学百二十六年）記念-』

東京外国語大学（2001-06）『日本語・日本文化研修留学生 修了レポート集』（2000年度-2005年度）

東京外国語大学 (<http://www.tufs.ac.jp/index-j.html>)

東京外国語大学留学生日本語教育センター

(<http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/index-j.php>)

文部科学省「国費外国人留学生制度について」

(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/06032818.htm)

The Japanese Studies Program for Japanese Government
(Monbu-kagaku-sho:MEXT) Scholarship Students
- Program Outline and Prospects of Tokyo University of Foreign Studies-

SUZUKI, Tomomi

This paper reports on the Japanese Studies Program for the Japanese government (Monbu-kagaku-sho:MEXT) scholarship students of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS), and offers some future prospects concerning this program.

The Japanese Language Center for International Students (JLC) manages this program at TUFS. It also carries out the development of the course curriculum.

Our course at TUFS is characterized by the following two advantages. First, JLC offers its Japanese studies students a rich and intensive course in Japanese language, JLPTUFS (Japanese Language Program of TUFS), while providing special courses in the field of Japanese linguistics and language education as well. Secondly, TUFS offers the students a multi-lingual and multicultural environment for fostering successful study as international students.

In the future, we must continue to develop these two strong points. We also must place emphasis on encouraging particularly those students whose major is Teaching of Japanese to Speakers of Other Languages (TJSOL) to apply for further courses at the graduate school of TUFS.